

連載

拝聴! ニッポンの 工場長

第
51
回

ソディック

上席執行役員
生産統括本部 副本部長

久保 光宏氏

「凡事徹底」で
アナログとデジタルを融合
創業以来のベンチャー精神で
「未だないモノ」を創る

NC放電加工機のベンチャーとして誕生したソディック。世の中になかった機械の実現を目指し、独自リニアモータ技術などを武器に世界に勇躍。放電加工機を始め、マシニングセンタ、独自構造の射出成形機、3Dプリンターなどの先端マシンを世に送り出してきた。その中核となるのが2018年に誕生の、多種多様な機械をフレキシブル生産できる先端工場「マルチファクトリー」。開発から調達、サービス、海外勤務など豊富な経験を持つ生産統括本部副本部長の久保光宏氏はマルチファクトリーを含め世界の生産拠点のレベルを押し上げるベンチャーマインド溢れる人材育成に力を注ぐ。

【株】ソディック 加賀事業所マルチファクトリー

受注状況に応じた多種多様、かつ高精度・高品質生産を柔軟に実現する次世代マザー工場として2018年操業開始。セル生産での自動組立、IoT活用、恒温室・熱変位室などのテストルームなど最新技術・設備を導入、リニアモータ駆動マシンなどの優位性を高め、次世代のキーマシンとなる金属3Dプリンターやアルミニウム合金対応射出成形機、マシニングセンタなどの生産を強化していく。延床面積約1万6,500㎡。

所在地 〒922-0561 石川県加賀市宮町11-1

実家の工場を継ごうと大学で機械工学を専攻
繊維産業の中国シフトで変更
海外での活躍を期待してソディックへ

— 実家が織機の部品工場だったという久保氏。いずれ家業を継ぐつもりで大学では機械工学を専攻したが、繊維産業の中国進出で家業継承を断念。自分を活かせる会社を探していたところ、久保氏に直接声をかけてきたのがソディックだった。

実家が織機の部品工場を経営していたので身近に製造機械がある生活でした。いずれはその工場を継ぐつもりで、大学も工学部の機械学科に入って修士にも進みました。

研究していたのは破壊力学で、破壊のプロセスを解析。どこにどんな亀裂が入ってどのように進展して破壊していくのか、そのプロセスを解析する研究です。まだパソコン性能が高くない時代。世界先端のスーパーコンピュータを使えて、実験もできるので夢中になりました。プログラム言語を学び、プログラムを自分で書いて材料を破壊するFEMシミュレーション解析を行っていました。

ただ大学時代くらいから繊維産業の拠点が中国に移っていったので、このまま父の工場を継ぐのは難しいと思い、機械工学を活かせる会社を探すことになりました。最初は大手を探していたのですが、たまたまソディックの人事担当者から連絡が入ったんです。その方は私の高校時代の先生から、「教え子にこんなやつがいる」と紹介を受けたようなんです。

私はソディックのことは知らなかったのですが、調べてみると当時珍しい放電加工機を製造するベンチャーで、ITを積極的に取り入れるなど技術力があり、積極的にグローバル展開している。大手に入っても歯車になるような仕事の仕方は嫌だと思っていたので、自分の可能性を活かせると思い入社を決めました。

一応面接はしました。5分くらい自分のことを話して、あとは創業者で当時の社長が1時間くらいしゃべっていました(笑)。海外で活躍したいと思っていたので面接の時から海外に行きたいとアピールしていましたし、入社してからずっと言っていました。

——入社後は機械設計を担当。ワイヤ放電加工機など構造の原理を先輩から学びつつ、機械系設計に取り組んでいたが、突然電源部門に異動となった。久保氏の熱い思いを聞いた当時の上司が「海外に早く行けるよう」にするための配慮だった。

入社してこの加賀工場で機械系の設計に配属になりました。全自動化をコンセプトにFMS＝フレキシブル生産システムを先取りした先端工場で、自動搬送機も動いていました。ソディックは汎用放電加工機でNC装置を搭載した最初のメーカーでしたし、3D加工方式を組み込むなど、とにかく世の中になくもないものを最初に出そうというベンチャーマインドが溢れている現場でしたね。

でもそこは1年くらいで、福井工場に異動になりました。急な配置転換でびっくりしました。理由を聞いたら「海外での仕事は設計ではなく、お客様に届けた機械のメンテナンスや修理、操作指導が中心となるから、電源のことを知らないとも足も出ないよ」ということでした。ありがたいと思いました。機械は大学院まで勉強しましたが、電気はオームの法則までくらいでしたから(笑)。



マルチファクトリーでのキサゲの指導の様子。デジタル化、AI化の進んだ先進工場だからこそ、こうしたモノづくりの「基礎力」は大切だと、久保氏

放電加工機にとって電気は加工速度などの性能を決める重要な部分。お客様が満足できる性能をきちんと引き出せるサポートをするまでがソディックの仕事の定義でしたから、それらをすべて全うしたいと思って頑張りました。上司や周りから指導を受け、自分で専門書を買ったりして、ロジックICなどを勉強しましたね。

念願のアメリカ赴任も力不足を痛感 英語とマネジメントの勉強のために 現地スタッフだけの支店へ

——福井工場で電気の技術を磨いて5年後、念願の海外へ。赴任地はアメリカ・シカゴのヘッドクォーターだった。しかし1年後、久保氏は規模の小さいニュージャージー支店に異動を希望する。

海外赴任できた時はソディックを選んで本当に良かったと思いました。歴代の先輩方は「足りないものは現地でなんとかするんだ」という意識で出ていっていましたし、私もそうでした。

ただ壁はありました。一番は言葉。私は大学時代から海外を意識して英会話の学校に通っていたのですが、さっぱり通じない。ショックでした。注ぎ込んだお金と時間は何だったのかと(笑)。私自身、現地の日本人スタッフとしては一番新しい。だから「俺は日本の最新情報を持っている。何でも聞いてこい」という密かな自信みたいなものがあつたのですが、言葉が通じないから現地のアメリカ人スタッフは昔からいる日本人に聞くわけです。悲しかった。このままだと英語も上達しないと思い、1年後により小規模のニュージャージー支店に異動させてもらいました。